

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Dynamics of Heritage Tourism : Heritage as a Place of Interaction

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安福, 恵美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002111

ヘリテージ・ツーリズムのダイナミックス： 相互作用の場としてのヘリテージ

安福 恵美子

(阪南大学国際コミュニケーション学部)

The Dynamics of Heritage Tourism: Heritage as a Place of Interaction

Emiko Yasufuku

(Hannan University)

ヘリテージが来訪者に呈示される過程には、ヘリテージ、ツーリズム、グローバル化という三要素間における相互関連性がみられ、ヘリテージをアトラクションとして成立するヘリテージ・ツーリズムはダイナミックな性格をもつ。そこでは、インタープリテーションを媒体とした見学者（ツーリスト）の経験が、ヘリテージの価値に深く関わることから、効果的なインタープリテーションはツーリズムとヘリテージの関係性を持続可能なものにさせる。

This paper reviews some aspects of the ways in which heritage is presented to visitors and analyzes the dynamics of heritage tourism, which is characteristic of interrelated components, heritage, tourism and globalization. In presenting heritage to visitors 'interpretation' plays an important role to make the relationship of tourism and heritage sustainable.

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. グローバル・プロダクトとしてのヘリテージ | 3. ヘリテージに対するツーリストの経験 |
| 2. 文化遺産の呈示と地域社会 | |

Key words: heritage, tourism, interpretation

キーワード：ヘリテージ、ツーリズム、インタープリテーション

1. グローバル・プロダクトとしてのヘリテージ

近代社会の構造が「文化生産(cultural production)」によってあらわされ、ツーリストの文化経験には、経済的価値を含めた諸々の価値が究極的なかたちで集積している、と考えたアメリカの社会学者マッカーネルは、ツーリストと近代社会のさまざまな文化表象の関係を探ることによって、ツーリズムという近代の社会制度を解明しようとした(MacCannell 1976, 1989)。近代ツーリズムの出現にともない、ツーリスト用の空間が観光産業を中心に作られるようになった現象を、近代社会におけるアトラクションの構造として考察したマッカーネルは、アトラクション⁽¹⁾というシステムを明らかにすることにより、ツーリズムを歴史や伝統などに対してイデオロギー的作用を及し、文化変容に対して力行使するものとして捉えた(MacCannell 1992)。

ツーリズムとヘリテージ(文化遺産)との関係を、マッカーネルのように文化生産と消費という観点から捉えた場合⁽²⁾、ヘリテージはアトラクションとして構築され、ツーリズムという場において消費される。近代化のなかで失われつつあった文化が「伝統文化」として再生されることは、ツーリストのまなざしの対象として、古いものや珍しいものが保存され、地域色がつよいさまざまな文化的イベントが演出されることであり、新たなアトラクションが誕生することを意味する。

近年、ヘリテージ・ツーリズムに対する人々の関心が高まるなか、ヘリテージという資源や価値、さらにはその観光市場がダイナミックな性格をもつことが指摘される(Hall and McArthur 1996:22)。ヘリテージ・ツーリズムは、文化、エスニック、そして教育の各要素が混ざったツーリズム形態であり、ツーリストの行動は遺跡の見学から伝統文化の体験など多様な形をとる(Hall and Zeppel 1990)。ヘリテージ・ツーリズムに対する人々の関心の高さは、世界文化遺産を観光対象とするツアーの急速な増加によって示される。世界遺産は、「顕著な普遍的価値」をもつ「人類の宝」として、さまざまな媒体によってその重要性が謳われている。そして、それに付随して企画される世界遺産探訪ツアーは、他の文化遺産を訪れるツアーを差異化する傾向が見られることから、世界遺産の社会的重要性を高めている(安福 1998a)。

文化遺産の公開は、1960年代の国際観光ブームにのって、国連が1967年を国際観光年に指定し、ユネスコが翌年、ボロブドゥールとモエンジョ=ダロ修復を観光開発に結びつけたことから始まるという(河野 1995:189)。世界遺産登録地の多くは、登録以前からすでにツーリストに人気があったため、世界遺産登録とツーリズムとの直接的な関係について明示することは難しい。しかしながら、さまざまな媒体を通じて世界遺産に関する情報が伝えられることによって、ヘリテージ・サイトとしての知名度が高まりつ

つある。

グローバル・プロダクトとしてのヘリテージ形成には、文化遺産に対する調査およびその評価が国際機関によって行われる過程がみられるが、ヘリテージ・サイトの保存計画はツーリズムを強く意識したものである⁽³⁾。このように、文化遺産に対する国際機関のマーケティングによって、以前には関連性が無かった個々の要素が取捨選択され、さらにはそのパッケージ化傾向が文化遺産を巡るツアーとして示される。断片化されたものをつなぎ合わせることによって行われる「ヘリテージのテーマ化現象」(Boniface and Fowler 1993: 154)には、「ヘリテージ」、「ツーリズム」、「グローバル化」という三要素間における相互関連性がみられる。このような状況において、ヘリテージは、〈ユニーク〉であると同時に〈ユニバーサル〉であるというパラドキシカルな特性をもち、その意味や意義は再解釈・再生産という過程を経て人々に共有される。

2. 文化遺産の呈示と地域社会

文化観光においては、他の地域と異なるエスニシティ、文化的アイデンティティ、ナショナリズム、伝統、文化遺産などがツーリストの観光対象となるが、ユニークさを求めるツーリストに対応するため、他の地域と異なる地域の独自性をアピールする現象が広くみられる。旅程に組み込まれるためには、各地域はそれがユニークであることによって人々の注目を集めるような際だった特徴によってマークされなければならない。地域の独自性は、ツーリストのためのアトラクションとなる。ツーリストを呼ぶために、アピールすべきユニークさをもたない地域では、それらが「創造」されるか、ごくありきたりのものが「エキゾチック」なものとして呈示される。そこには、地域や国家の文化的イメージが国際市場に出される方法としてツーリズムが存在する。

ヘリテージは、各々の社会においてその文化的重要性が認識され、意義を与えられ、保護され、象徴として再生産されることによってアトラクションとなる。さまざまなヘリテージ・サイトにおいてみられるその過程には、個人、地域、国家あるいは文化という諸レベルにおけるアイデンティティの形成が密接に関わる。文化遺産が地域や国家アイデンティティ創出の一手段としてツーリストに呈示される諸相には、文化遺産のオーセンティシティが諸要素間の戦略的な協調関係によって、社会的に構築される過程がみられる(安福 2000)⁽⁴⁾。

異なる文化がツーリストのまなざしの対象となる場合、文化的差異の商品化が生じる。地域住民に対するイメージ形成やステレオタイプ化、さらには国家あるいは地域の文化振興において、地域社会に与えるツーリズムの負のインパクトがこれまで度々指摘され

てきた。しかしながら、近年、地域経済活性化のためにツーリズムを振興する地域において、ヘリテージ・マネジメントに対する地域住民の参画が注目されることから、地域社会と共生関係を築く可能性をもつツーリズム形態としてヘリテージ・ツーリズムを捉える動きがみられる。

ヘリテージを来訪者に呈示する過程において、地域社会と観光産業との間のギャップが文化差としてあらわれる事例 (Hall et. al. 1993) にみられるように、ヘリテージ・マネジメントをめぐるのは、行政機関、民間団体、非営利組織⁽⁵⁾、地域社会、観光産業などの諸要素が複雑に絡み合う。しかしながら、地域住民によるヘリテージ・マネジメントへの参画を重要視する近年の流れにおいては、ヘリテージ・ツーリズムは地域社会がヘリテージを外部の者 (ツーリスト) にアピールし、そのデモンストレーションに積極的に関わる場として捉えられる。その背景には、ツーリストを魅了するのは地域のヘリテージであることから、地域遺産の魅力を出し、それを持続させるためには、ヘリテージ・マネジメントに対する地域社会の関わりが不可欠であるとする考え方がある⁽⁶⁾。地域住民によるヘリテージ・マネジメントへの関わりは、大きく変化するグローバルな規模における観光産業の市場競争において、経済活性化に対するモデルとなるものであり (Oakes 1993)、ツーリズムによる地域社会のエンパワーメントとして注目される。

3. ヘリテージに対するツーリストの経験

地域住民がヘリテージ・マネジメントに関わる動きのなかで、貴重な文化やヘリテージ資源を保護し、かつ活用するためのストラテジーとして、人とヘリテージ・サイトを結びつけることの重要性が強調される傾向がみられる。それは、ヘリテージに対する人々の関心が高まるにつれ、遺産保存を支える役割を担う見学者の存在を無視することができなくなっているためであり、マネジメントを担当する側がサイトの価値を保つばかりではなく、見学者の要望に応える必要が生じているからである。これまで行われてきたヘリテージ・マネジメントの多くは、ヘリテージという資源を中心においた考え方に基づくものであり、このようなアプローチは、人という要素、とくに見学者の重要性を考慮していないことが指摘されている (Hall and McArthur 1996:15)。

文化遺産の公開とその保護活動は、文化遺産の価値を保ちながら、それに接する見学者の経験を保証するという点において相反するものである。しかしながら、ヘリテージを呈示する側だけでなく、見学者側もヘリテージに対して影響を与えるという考え方からは、遺産保護に対して、資源としての物理的な面ではなく、人と資源の相互作用を重要視する動きがみられる。ヘリテージを見る側の経験がヘリテージに対する意味づけに

重要な役割を果たすという考えかたは、ヘリテージとツーリズムの密接な関係性を示すものである。

近年、ヘリテージの意義を見学者に伝え、ヘリテージに対する見学者の理解力を高めるため、インタープリテーションという役割が注目されている。ヘリテージのインタープリテーションは、見学者に対してヘリテージ・サイトの意味や意義を説明するための教育活動としてはじまったといわれる(Light 1995: 205)。レジャー活動として行われるヘリテージ・ツーリズムにおいて、インタープリテーションはインフォーマルな教育活動として、ヘリテージ・サイトのマネジメントとその保護に対して大きな影響を与える。ヘリテージの意義をツーリストにいかにかつ伝えるかという点において、インタープリテーションはヘリテージの価値を高めるための重要な役割を果たす⁽⁷⁾。

ヘリテージに対するインタープリテーションの意義として、チルデン (Tilden 1977) によるガイドラインが引用されることが多いが、そこにおいて強調されるのは、対象に対する理解、理解による対象に対する重要性の認識、さらには認識を通じて対象の保護に役立つようなインタープリテーションの役割である⁽⁸⁾。ここで重要な点は、対象の意味がそれを見る側(ツーリスト)に存在するという考え方である。インタープリテーションによるヘリテージの呈示は、ツーリストの参画を促すことにより、ヘリテージという資源を保護する試みである。したがって、インタープリターは、見学者を「裏舞台」へ導く案内人という役割だけではなく、「文化の仲介者」あるいは伝統と近代の仲立ちをする役割を担うものとして捉えられる(Nuryanti 1996:254)。

ツーリストの文化経験に言及したマッカーネルのツーリズム理論においては、オーセンティシティを希求するツーリストの経験がツーリズムの演出性において一元的に捉えられていた。しかしながら、多文化化と情報化傾向が強まる現代において、ヘリテージがツーリストに対してどのようにアピールするかは、世界、国、地域、個人という各レベルによって異なる。そのため、ヘリテージに対するツーリストの多様な経験は、ヘリテージに対するオーセンティシティの構築にも関わる⁽⁹⁾。

ツーリズムをサービスを要求する側と供給する側という2種類の人間から成り立つ社会関係の構造(Watson and Kopachevsky 1994)として捉えた場合、ゲストはつねにストレンジャー(よそ者)であり、両者の接触においてはツーリストの画一的な経験が作りだされる。しかしながら、ヘリテージ・ツーリズムにおいては、呈示されたヘリテージに対して、ツーリストの経験がヘリテージの意味づけに関わることから、両者の関係は相互作用的である。

効果的なインタープリテーションは見学者の経験の質を高めることによって、ツーリズムとヘリテージのつながりを持続可能なものにさせる⁽¹⁰⁾。文化を社会における相互

作用の所産として捉えた場合、ヘリテージとツーリズムの間にみられるダイナミックスは、ヘリテージというアトラクションの構築をめぐる社会構造のあらわれであり、地域社会の自律的発展と密接な関わりをもつ。

注

(1) マッカーネルがいうアトラクション (tourist attraction) とは、「ツーリスト、見どころ(sight)、マーカー(marker) [見どころ sight に関する情報] という三者間に生じた経験的な関係 (MacCannell 1976/1989:41)」を示す概念である。本稿においては、「アトラクション」をマッカーネルが考える概念として捉えると同時に、一般的に人々を魅了して引きつける観光対象として捉える。

(2) このような観点からツーリズムを捉える研究には、たとえば、コーエン論文 (Cohen 1988)、アーリー論文 (Urry 1990)、ワトソンとコパチェブスキー論文 (Watson and Kopachevsky 1994) などがあげられる。

(3) アジア地域においてみられる文化遺産の保存修復は、この地域における観光文化が急速に進むなかで、文化が貴重な資源となっていることを示すものである。途上国における文化遺産の保護をめぐるのは、たとえば、カンボジアのアンコールワットの遺跡保存に対するユネスコの関与(Wager 1995)や、ベトナム・ハノイの文化遺産の保護に対して、ユネスコという制度的支援の役割の大きさ(Logan 1995)などの事例研究においてみられる。そこにおいては、他の地域において展開されているユネスコによる活動と同様に、ユネスコが示す関心の基となっているのが、文化資源に対するマネジメントの方法であり、文化資源に対するよりよい保護と活用は地域社会や国にとって、さまざまな利点をもたらすばかりでなく世界のためになるという考え方である(Logan 1995:332)。

国際機関によるヘリテージ・サイトのマーケティングは、ユネスコ以外のものとしては、たとえば、韓国の文化遺産に対する世界観光機関 (WTO) の関わりなどにおいてみられる (World Tourism Organization 1999)。

(4) たとえば、沖縄県竹富島の伝統的町並み紹介に欠かせない赤瓦の持つ意味について、島の町並みがどのように外部者に提供されているかに関する事例研究 (福田 1996) には、赤瓦の持つ意味が、町並み保存運動における赤瓦のイメージ戦略として捉えられ、赤瓦屋のオーセンティシティが町並み保存運動において構築されてゆく過程が示されている。それは文化財保護が文化行政を司る市町村単位の地域アイデンティティと密接な関係をもつことへの指摘であり、そこには「伝統の創造」に対するツーリズムの関わりがみられる。さらに、竹富島の「伝統文化」に対するツーリズムの関わりについては、

体験の真正を要求するツーリストとそれを提供するホスト側の共約性、さらにはこれらの2者とマスメディアの共犯関係による竹富島のイメージ形成に対する指摘がある(森田 1997)。森田はこのような状況を、外部から流入してきた「伝統文化」という概念を「地域の人々が戦術として操作しながら生活実践としてうまく取り入れて自分たちのものへと練り上げていった過程(森田 1997:53)」と述べ、さらに、伝統と赤瓦の屋根の保存に対しては、住民による言説の違いがあることを指摘している。

(5) 近年、ヘリテージ・マネジメントに関わる NGO の活動が活発化している。たとえば、インドにおいて、政府のヘリテージ運営に反対する NGO の活動目的は、文化のオーセンティシティや文化をめぐるポリティクスを人々に理解させることであるという(Alley 1992 :23)。

(6) ヘリテージ・マネジメントに対する地域社会の関わりについては、たとえば、ニュージーランドのヘリテージ・ツーリズムにおいて、マオリの人々が、自分たちが持つ資源をコントロールし、そのマネジメントに対する関わりを主張するようになった事例(Hall et. al.1993)にみられるが、具体的には、それはマオリの視点からの資源に対するプロモーションやインタープリテーションである。この事例研究には、マオリのツアー・オペレーターが決めるオーセンティシティの問題が取り上げられている。

(7) まだ社会制度的に認められていないような知名度が低いヘリテージが、ツアーガイドのパフォーマンスによって、重要性をもつものによってゆく過程については、ファインとスピーア論文(Fine and Speer 1985)を参照。

(8) チルデンは、この表現は公園サービス運営マニュアルからの引用であると述べている(Tilden 1977 : 38)。

(9) 世界文化遺産の保存活動見学ツアーにおける、文化遺産に対するツーリストの経験に関する研究(安福 1998b)からは、「ヘリテージが必要としているのは、保存以上に、見学者に伝わるべきその意義(Nuryanti 1996:252)」であることがわかる。研究対象となったツアーにおいては、文化遺産のオーセンティシティがツアー参加者によって強められたり弱められたりする現象がみられたことから、ヘリテージに対するツーリストの経験の多様性をみることができる。

(10) ツーリズムとヘリテージのつながりを持続可能なものにさせる可能性についての研究は、たとえば、モスカード論文(Moscardo 1996)を参照。

文 献

Alley, K.D.

1992 Heritage Conservation and Urban Development in India. *Practicing Anthropology* 14(2):23-26.

Boniface, P. and P.J. Fowler

1993 *Heritage and Tourism in 'the Global Village'*. London and New York: Routledge.

Cohen, E.

1988 Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research* 15:371-386.

Fine, E. C. and J. H. Speer

1985 Tour Guide Performances as Sight Sacralization. *Annals of Tourism Research* 12:73-95.

福田珠己

1996 「赤瓦は何を語るのか：沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動」『地理学評論』69(7):727-743。

Hall, C.M. and S. McArthur

1996 *Heritage Management in Australia and New Zealand*. Melbourne: Oxford University Press.

Hall, C.M. et.al.

1993 The Implication of Maori Perspectives for the Management and Promotion of Heritage Tourism in New Zealand, *GeoJournal* 29(3):315-322.

Hall, C.M. and Zeppel, H.

1990 Cultural and Heritage Tourism: The New Grand Tour? *Historic Environment* 7(3-4):86-98.

河野靖

1995 「文化遺産の保存と国際協力」石澤良昭編『文化遺産の保存と環境』朝倉書店。

Light, D.

1995 Heritage as Informal Education. In Herbert, D.T.(ed.) *Heritage, Tourism and Society*. London: Pinter.

Logan, W. S.

1995 Heritage Planning in Post-Doi Moi Hanoi: The National and International

- Contributions *Journal of American Planning Association* 61 (83):328-343.
- MacCannell, D.
1976/1989 *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*. New York: Schocken Books.
(1999 Berkeley :University of California Press.)
1992 *Empty Meeting Grounds: The Tourist Papers*. London: Routledge.
- Moscardo, G.
1996 Mindful Visitors: Heritage and Tourism. *Annals of Tourism Research* 23:376-397.
- 森田真也
1997 「観光と『伝統文化』の意識化—沖縄県竹富島の事例から—」『日本民俗学』209:33-65。
- Nuryanti, W.
1996 Heritage and Postmodern Tourism. *Annals of Tourism Research* 23: 249-260.
- Oakes, T. S.
1993 The Cultural Space of Modernity: Ethnic Tourism and Place Identity in China. *Environmental and Planning D: Society and Space* 11:47-66.
- Robinson, M. and P. Boniface (eds.)
1999 *Tourism and Cultural Conflicts*. Oxford & New York: CABI Publishing.
- Tilden, F.
1977 *Interpreting Our Heritage*. California:University of California Press.
- Timothy, D.J.
1997 Tourism and the Personal Heritage Experience. *Annals of Tourism Research* 24:751-754.
- Urry, J.
1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London:Sage Publications.
- Var, T. and M. Korzay
2000 Heritage Multicultural Attractions. *Annals of Tourism Research* 27: 534-535.
- Wager, J.
1995 Policy and Practice: Environmental Planning for a World Heritage Site: Case Study of Angkor, Cambodia. *Journal of Environmental Planning and Management* 38(3):419-434.

Watson, G. L. and J.P. Kopachevsky

- 1994 Interpretations of Tourism as Commodity. *Annals of Tourism Research* 21:643-660.

World Tourism Organization

- 1999 *Guide for Local Authorities on Developing Sustainable Tourism*. Madrid: World Tourism Organization.

安福恵美子

- 1998a 「マッカーネルの観光理論からみた世界遺産観光の構造分析」『観光研究』9(2):1-8。
- 1998b 「ヘリテッジ・ツーリズムとオーセンティシティー文化遺産の解釈をめぐって」『阪南論集』（人文・自然科学編）34(1):29-39。
- 2000 「文化表象としてのツーリズムー近代におけるアトラクションの社会的構築ー」『ソシオロジ』44(3):93-107。